

# 珍しい花弁形状のきく新品種開発と開花調節方法

～ブライダルなど輪ぎくの新たな需要開拓を目指す～

長谷川徹（農業総合試験場東三河農業研究所花き研究室）

【平成29年12月15日掲載】

## 【要約】

「かがり弁」と呼ばれる、先端に複数の突起がある花弁をつける白色、赤紫色、黄色の輪ぎく3品種を開発した。珍しい花弁の形であることから高い商品性を有すると評価されており、従来の輪ぎく品種とは異なる新たな需要開拓が期待できる。3品種を同一作型で同時期に開花させるためには、電照打ち切り前の黄色品種への遮光フィルム被覆処理が有効である。

## 1 はじめに

本県は全国一の輪ぎく生産県であり、出荷本数は全国の約半分を占めている。従来、輪ぎくは主に葬儀用、仏花用に利用されているが、近年は葬儀形態の変化により需要が減少傾向にある。そこで、ブライダルなどの祝い事やフラワーアレンジメントにも利用可能な、新規性の高い品種の開発に取り組んだ。また、到花週数の異なる品種を同時期に咲かせるための開花調節方法を検討した。

## 2 方法及び結果

### (1) 品種の開発

平成17年に県所有の輪ぎく系統間の交配を行い、外側花弁のみが「かがり弁」と呼ばれる、先端に複数の突起がある花弁となった淡ピンク色の系統を選抜した。この系統を材料に、環境基盤研究部生物工学研究室が無菌培養及び照射材料の作出、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構（以下「量研」という。）高崎量子応用研究所が炭素イオンビームの照射を行い、花色やかがり弁の発生程度が異なる様々な変異体を作成した。その中から、中央の花弁までかがり弁となった白色及び赤紫色の2系統を選抜した。また、選抜途中の系統と県所有の黄色輪ぎく系統との交配を行い、黄色のかがり弁1系統を選抜した。

選抜した3系統について県内の輪ぎく生産者による試作及び花き市場における評価を行った結果、通常輪ぎく品種と同様の栽培が可能で、珍しい花弁の形が高い商品性を有すると評価された。そこで、平成29年6月に3系統の開発を



図1 開発した「かがり弁」3品種

左上：黄色品種、右上：白色品種

下：赤紫色品種



図2 花弁の形状

左から輪ぎく品種「神馬」、「かがり弁」

白色品種、赤紫色品種、黄色品種

完了し、同年11月に品種登録出願を行った（図1、2）。

## （2）開花調節方法の検討

開発した3品種の中で、黄色品種は他の2品種よりも開花が1週間程度遅い傾向がある。3品種を同時期に出荷するためには、黄色品種のみ電照打ち切り日が早い作型のハウスで栽培するなどの工夫が必要で、同じ作型のハウスでは栽培しにくい。

そこで、同一作型で3品種を同時期に開花させるために、遮光フィルムの夜間被覆による短日処理の効果を検討した。平成29年4月開花作型において、電照打ち切り日の1週間前から電照打ち切り日まで、黄色品種に対して遮光フィルムを夕方に被覆して朝に外す処理を行い、暗期中断用の照明が当たらないようにした（図3）。その結果、遮光フィルム被覆を行った区の開花日は無処理区よりも5日早くなり、白色及び赤紫色品種とほぼ同時期に開花させることができた（図4）。

遮光フィルム被覆方式は朝夕にフィルムを操作する作業が必要になるものの、同一作型で3品種を同時期に開花させるには有効な手段と考える。



図3 遮光フィルムで被覆した様子



図4 電照打ち切り53日目の開花状況  
枠内が遮光フィルム被覆区  
枠の下が無処理区

## 3 まとめ

珍しい花卉形で商品性の高い「かがり弁」の3品種を開発した。従来の輪ぎく品種とは大きく異なる、華やかな雰囲気の花であることから、祝い事やフラワーアレンジメントなどの需要にも利用可能と考える。

3品種を同時期に出荷するためには、黄色品種のみを他の2品種よりも電照打ち切り日が早い作型のハウスで栽培することが望ましいが、同一作型で栽培する場合には電照打ち切り前の黄色品種への遮光フィルム被覆処理が有効である。

なお、本稿で紹介した3品種は、愛知県と量研との共同研究により開発したものである。